令和5年度第3回鎌倉市総合教育会議　議事録

1　開催日時　令和6年(2024 年)1月 17 日（水）午後1時 30 分から午後3時まで

2　開催場所　鎌倉市役所第3分庁舎1階　講堂

3　出席者　松尾市長、高橋教育長、下平教育委員、朝比奈教育委員、長尾教育委員、林教育委員

4　関係者　共生共創部長、教育文化財部長、教育文化財部次長

5　事務局　共生共創部企画課長、企画課主事、
教育文化財部次長（兼教育総務課長）、教育総務課課長補佐、教育総務課担当職員

6　傍聴者　3名

【市長】本日は御多忙の中、お集まりいただきましてありがとうございます。
ただ今から、令和5年度第3回鎌倉市総合教育会議を始めます。本日は、「教育大綱の推進について」と「教育大綱の見直しについて」を議論したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。
そして傍聴にお越しいただきました皆様、ありがとうございます。会議の傍聴につきましては、鎌倉市教育委員会傍聴規則を準用いたしますので、御協力のほどよろしくお願いいたします。
それではまず事務局からの発言をお願いします。

【事務局（企画課長）】企画課長の安冨です。本日もよろしくお願いいたします。
中身に入る前に一点御確認をお願いいたします。
本日、神奈川新聞社様から取材申し込みをいただきました。写真撮影を行いたいという御要望をいただいております。お認めすることでよろしいでしょうか。
（　委員了承　）
ありがとうございます。
続きまして、本日の配付資料でございます。本日の次第にございます4種類になります。
まず、資料1「鎌倉市教育大綱における重点的に取り組む施策に係る関連事業について（令和5年度の実績（予定含）、令和6年度の取組予定）」、資料2「鎌倉市が目指す次期教育大綱・計画」、そして参考資料としまして、第1期及び第2期の教育大綱のリーフレットを配付しております。次第を含めまして、5点となります。
御確認お願いいたします。
続きまして、会議の運営にあたってのお願いです。御発言に当たりましては、マイクの使用に御協力いただきますようお願いいたします。
事務局からは以上です。

【市長】それでは、次第に沿って進めたいと思います。

「教育大綱の推進について（令和5年度の実績及び予定、令和6年度の取組予定）」について、事務局から説明をお願いします。

【事務局（企画課長）】教育大綱の推進につきまして、資料1に沿って説明させていただきます。

本資料ですが、令和2年度から令和6年度までを期間としている鎌倉市教育大綱について、期間内に重点的に取り組む政策として掲げた4つの政策ごとに事業内容の概要を説明している資料でございます。

本日は施策ごとに特に報告させていただきたい事業につきまして、市長部局、教育委員会の順に説明をさせていただきます。まず、1ページの「1　子どもたちが夢を持って学べる教育の推進」についてですが、こちらにつきまして市長部局の事業はございません。

【事務局（教育文化財部次長）】教育文化財部次長兼ねて教育総務課長の保住です。よろしくお願いします。

教育委員会所管部分の「1　子どもたちが夢を持って学べる教育の推進」に係る事業としては、1-2「教育支援事業」において、外国人英語講師や図書館専門員等を配置して、子どもたちの個性や魅力を伸ばすための教育を推進するとともに、少人数学級の編成、少人数指導の充実、小中連携の取組も強化しました。また、令和3年度から実施している「鎌倉スクールコラボファンド」を活用し、外部の教育団体とコラボレーションして課題解決型学習を現時点で小学校 10 校・中学校4校で実施しています。また、年々申請校が増加していることに伴い、令和6年度については、令和5年度に引き続きSDGsをはじめとする様々な社会の課題を子どもたちが自ら発見し、探究を深める課題解決型学習を拡大して実施予定です。

1-5「相談室事業」では、学校における学習に馴染めない児童生徒に対して興味や関心等に応じた「かまくらULTLAプログラム」を引き続き実施し、各プログラムの参加人数は延べ 23 名の児童生徒が参加し、自分らしい学びの発見につながりました。また、校内フリースペースの全校整備に向けて整備計画や運営ガイドラインの策定等の準備を行い、令和6年度は当該年度整備対象校の校内フリースペースを整備していく予定です。そして、令和7年4月の学びの多様化学校の設置に向けて教育課程や教職員の体制、施設等を整備していきます。

【事務局（企画課長）】続きまして、4ページ、「2　教育環境のさらなる充実と学校施設の計画的な整備」についてです。こちらに関しても、市長部局の事業はございません。

【事務局（教育文化財部次長）】教育委員会所管部分の「2　教育環境のさらなる充実と学校施設の計画的な整備」に係る事業において、2-2「ICT 教育環境整備事業」では、課題として捉えていた端末やネットワークトラブルへの対応として GIGA スクールサポーターによる相談窓口の一元化や全校に対する支援として ICT 支援員の配置を検討していきます。

2-3「コミュニティスクール整備事業」につきましては、令和4年度に手広中学校区、第二中学校区、令和5年度に玉縄中学校区、深沢中学校区の4箇所に設置し、令和7年度までに全中学校ブロックで設置できるよう令和6年度では大船中学校区、腰越中学校区、岩瀬中学校区の設置に向けて取り組んでいるところです。

また、2-4「小学校施設整備事業」及び「中学校施設整備事業」につきましては、児童生徒に安全で快適な学習環境を提供し、生活の場としてのゆとりと潤いのある環境づくりを目指すため、令和5年度中に策定予定の学校整備計画に基づき、個別の整備計画も検討していく予定です。

【事務局（企画課長）】続きまして、5ページ、「3　子どもの成長に合わせた切れ目のない支援の充実」についてです。

まず、市長部局の所管事業として、3-1「ひきこもり対策推進事業」です。

この事業ではひきこもり支援指導員を中心とした庁内関係課や支援機関との連携により、令和5年 11 月末時点での相談件数は延べ 1,096 件となっております。また、令和5年度から試行的に実施している居場所事業の利用者も延べ 49 件となっています。実施した効果としては、相談支援をより手厚く行うことができ、ひきこもりの方や家族が安心して過ごせる居場所を提供することで、不安を軽減でき、社会参加や自立の促進が図られたと考えておりますが、他方、課題として、周知が足りていない部分があると捉えています。そのため、ニーズに十分に対応するための情報発信に努めながら、引き続き、令和6年度も、ひきこもり当事者やその御家族に対する支援を行ってまいります。

続きまして、3-3「発達支援サポートシステム推進事業」です。この事業ではサポーターの養成やサポーターの小中学校、幼稚園、保育園への派遣を継続しておりますが、特にサポーターにつきましては令和4年度までの有償ボランティアという形式では「活用しづらい」という声もあったため、令和5年度から職の形態を変更しました。

令和5年度の実績ですが、7回で1セットとなるサポーター養成講座を2クール実施し、115 人が修了しました。また、サポーターの派遣状況ですが、希望する公立小中学校に 52 人、幼稚園3園・保育園2園の計5園のモデル園に 10 人を派遣しました。現在の課題としましては、サポーターによって派遣時間数に偏りがあることや、幼稚園・保育園への派遣実績が少ないということがあり、令和6年度は、派遣先のヒアリング等を通じて、活用の幅を広げていきたいと考えています。

次に、8ページの 3-11「子育て支援事業」です。令和4年度に市役所第6分庁舎で開設しました「かまくらこども相談窓口きらきら」の状況について、令和5年 12 月1日時点で 418 件の相談がございました。実施した効果としては、子どもや子育てに関する悩みごとについて、一つ一つの悩みや不安を受け止め、必要な対応につなげられるよう関係部署との連携を図れたと考えております。今後は、リモート相談を含めた事業の周知等に努めてまいります。

最後に、3-12「育成事業」です。不登校状態を起因とした児童生徒の孤立を防ぐため、フリースクール等利用児童生徒支援補助金制度を創設し、令和5年9月より申請受付開始しました。1月9日時点での申請件数は 69 件、認定施設数は 21 施設となっています。当該事業の実施した効果は、不登校傾向にある児童生徒がフリースクール等の居場所を利用する際の経費の一部を支援することで、それぞれの特性に合った通いの居場所を確保し、不登校状態を起因とした孤立を防ぐことが出来たと考えています。また、課題としては、制度を開始したばかりというところもあり、周知が行き届いていないというところ、補助対象となる児童生徒の事前把握が挙げられます。今後は、市ホームページでの周知や、市教育委員会等と協力連携していきたいと考えております。

【事務局（教育文化財部次長）】この施策に係る教育委員会所管部分の事業としては、7ページの学級介助員、スクールアシスタントの配置や、特別支援学級を全校に設置することにより、特別な支援を必要とする児童生徒の教育環境の充実を図る事業である 3-9「特別支援教育事業」などを引き続き行っていきます。

【事務局（企画課長）】次に、9ページ、「4　地域の特色を活かした郷土学習の充実」についてです。

11 ページにございます 4-9「伝統鎌倉彫振興事業」です。伝統鎌倉彫事業協同組合が行う各種事業を支援することにより、市内の小中学生に鎌倉彫の魅力を伝える体験教室等に要する経費の一部を助成しました。令和5

年7月から10月に実施した「親子で楽しむ鎌倉彫体験教室」の参加者数は192組384名となりました。事業の効果としては、市内の小・中学生が鎌倉彫に触れることで、郷土への愛着と豊かな人間性を育むことができたと考えますが、鎌倉彫体験教室の参加者が減少傾向にあることが課題であることから、今後、特別企画を実施することなどで、新たな参加者の獲得につなげたいと考えております。

市長部局は以上です。

【事務局（教育文化財部次長）】この施策に係る教育委員会所管部分の事業としては、市民等の学習・交流の場としての積極的な施設運営を行う「鎌倉国宝館管理運営事業」及び「鎌倉市歴史文化交流館管理運営事業」を行っているところです。

4-2「鎌倉国宝館管理運営事業」では、鎌倉国宝館に所縁のある宝金剛寺（小田原市）の特別展及び鎌倉国宝館創立の契機となった関東大震災の 100 周年特別展を開催し、イベントを実施しましたがコロナ禍で中止していた各種イベントも順次実施していきます。

また、4-3「鎌倉市歴史文化交流館管理運営事業」では、郷土学習の促進が図られ、鎌倉の歴史に対する興味関心が持続的かつ更に深化したものとなることを期待しつつ、様々なイベントを通して親しみを持ってもらうために鎌倉女学院が創立 120 周年を迎えるのでコラボレーションした企画として「女学生がみた近代の鎌倉」をテーマに企画展の実施を検討しているところです。

【市長】ただいまの説明につきまして、御意見、また御質問等ございましたらお願いいたします。

【林委員】感想ですが、今、4-2で御紹介いただいた関東大震災の100周年特別展について、私も拝見しました。とても歴史ある資料があったのですが、場所が狭くて、皆さんの目に触れる機会が少なかったのではないかという印象でした。これからも、色々な展示があると思いますが、やはり皆さんにアピールできるような場所が確保できるといいなと思いました。

【事務局（教育文化財部次長）】御感想をありがとうございます。観覧者の方からも色々な御意見をいただいているので、開催場所等の検討をしていきたいと考えております。

【長尾委員】質問ですが、3-12「育成事業」でフリースクールの助成金制度について、認定施設が21施設とありますが、この施設は鎌倉市内でしょうか。それとも、市外もしくは県外なのか、実情をお伺いできればと思います。

【事務局（企画課長）】施設は市内です。

【長尾委員】わかりました。市内のフリースクールの機能がある程度、充実しているという認識でよろしかったでしょうか。

【事務局（企画課長）】今年9月から制度を始め、すでに 21 施設が補助対象となっておりますので、施設としてはそれなりの数を確保していると考えております。

【市長】市外の施設もあるはず。
　そうですね。考え方としては市内には限らず、選択肢を増やしていくという考えで行っています。

【長尾委員】21 施設があるということは、選択肢として非常に素晴らしいことだと思います。

【下平委員】今回、実施した効果や、それから期待される効果、課題、課題解決に向けた取組等、非常に見やすい資料にしていただいて、有難いと思います。
　質問ですが、5ページの 3-3 について、発達支援サポーターの養成講座で 115 人が終了しているのですが、実際活動されたのが 10 人ということで、偏りがあったとの課題があるようです。これは希望するところがないために、せっかく養成講座終了した人の活躍の場がないのか、逆に養成講座は終了しているけれども、実際のニーズに応えられる人がいないのか、その辺の実情はいかがでしょうか。

【事務局（企画課長）】派遣される側、サポーター側と受け手側のマッチングがなかなか難しく、特に幼保に関しては、学校に比べて少ないと聞いておりますので、両面あると思います。

【下平委員】幼保や小学校ではなく、もっと前の段階でのサポートもできるのですよね。例えば、きらきらで発達支援についての支援等を行うことはないのですか。活躍の場は限られているのですか。

【事務局（企画課長）】そのサポートとして登録しているのは、小中学校です。当然そこで得られた知識がございますので、サポーター登録者として正式に派遣されるかは、今申し上げたとおりですが、知識を得られた方が地域のボランティア等、そういった形で協力されることはあるかもしれません。しかし、市としての派遣先というのは、モデル校になります。

【朝比奈委員】11 ページにあります「伝統鎌倉彫振興事業」で、鎌倉彫体験教室の参加者が減少傾向にあるとありますが、参加するのに参加者個人の費用負担はあるのでしょうか。
　私、円覚寺で鎌倉彫の体験を企画したことがあって、要は彫るところまでは高額ではないので施設側が負担できるけれど、その先の最終的に仕上げるために、2万円ほどかかったことがあります。職人が少し整えて、本当に良いものに仕上げようとすると、さらなる金額がかかる。そうすると、やはり高額だなということで、参加者が減ってしまうと思います。あと、おそらく会場としては鎌倉彫資料館などで行うと思いますが、特別企画を実施することもあるから、たまにはお寺まで行って、お寺の本堂で鎌倉彫がどのように使われているかなどを見せてあげたら、もう少し興味が深まるのではないかなという気がしました。
　あと、全然違うところですが、これだけ各学校でのインターネット環境、ICT 環境が整っていくと、いわゆるネットワークトラブルが起こりがちになると思うのですが、インターネットの回線を取られた上で、防犯カメラとか、いわゆるそのローカルネットワークに、やっぱり機器がぶら下がるわけだから、突然繋がらなくなることがあると思います。原因はどれか一つの IP アドレスが重複しているとか、そういうことだけれども、たったそれだけのことで急に使えなくなるということが、規模が大きな学校だと起こり得るのではないかと思うのですが、そういうことが発生した場合は、速やかに対処できる仕組みがあるのか興味があったので、お尋ねします。

【教育文化財部長】教育文化財部長の小林でございます。
　学校に専用回線を引いているため、トラブルはかなり少ない状況になっています。ただ、朝比奈委員がおっしゃる通り、Wi-Fi が繋がらないですとか、そういうことがあった場合には教育指導課に連絡が入って、担当の指導主事が電話やオンライン等で確認ができるものは対応しますし、実際にそこの場所に行って、調整をすることもあります。

【事務局（企画課長）】鎌倉彫の体験の費用については、場所によって材料費を別途取るところや、材料費を含んでいるところがあります。鎌倉彫工芸館ですと材料費別で児童 3,000 円、一般 2,500 円、鎌倉彫会館ですと材料費込みでお子さんが 1300 円、2,700 円コース、大人は 3,200 円コースとなっていまして、一定程度の御負担をいただいているという状況です。

【長尾委員】3-1「ひきこもり対策推進事業」について、質問です。
　相談支援数、延べ数は 1,000 件を超えてらっしゃるということで、支援員の方を1名から2名に増員されたと記載されていますが、これは令和6年度の体制も2名のままなのかをお聞きしたいのと、あと居場所の利用者数は 49 件ということで、試行的に実施されたとのことですが、令和6年度の実施場所についても、どのような計画かを教えていただければと思います。

【事務局（企画課長）】令和6年度は現行の令和5年度の体制の維持を予定しています。場所についても同じ予定です。

【林委員】先ほどサポーター養成講座、いわゆるフォローアップ研修などがありましたが、マッチングが少ないので、フル活用がなかなか難しいというようなお話もありましたが、来年度も継続することで、そういう方たちが増えてくると思います。応募の様子はどうなっていますか。増えるような感触でしょうか。

【事務局（企画課長）】養成講座自体はニーズがあると聞いています。令和6年度につきましても、養成講座は令和5年度と同じ体制を予定しているところです。当初は少し縮小も検討しておりましたが、今の段階では現体制を継続していくことを予定しております。

【林委員】昨年度、伺えばよかったのかもしれませんが、この7回の研修というのは様々な視点での7回講座ですか。

【事務局（企画課長）】詳細な内容を持ち合わせていないのですが、7回で1セットですので、いろんな視点で学んでいただいて、その1セットを終了していただいた方がサポーターになる知識をつけていただくという内容となっています。

【林委員】様々な支援員や指導員が様々な場所で支援をしてくださっている中で、各学校の中にも様々な立場で入っていただいている。非常に有難いことですが、子どもたちの立場から見ると、支援のアプローチの仕方を共有していくことがとても大事だと思っています。私はこれが得意だから、この形で指導していくのではなくて、この子

はどうしていったら良いのか、学校生活でも、ひきこもり対応、不登校対応のときに、その子の一番良い未来に向けての育ちを共有していこうという意識をそのサポーターの研修の中でもやっていただきたい。学校現場の教員もそれが必要と感じているところなので、ぜひ、その視点を入れて、指導の方法や研修の方法も考えていただけたらなと思いました。

【事務局（企画課長）】いただいた御意見を原局にも伝えていきたいと思います。
　先ほどのフリースクールについて、大変失礼しました。市外の施設も入れて、21 施設です。

【長尾委員】市内にどのくらいあるのですか。

【事務局（企画課長）】後ほど詳細を確認いたしまして、資料を共有させていただきます。横浜や藤沢などの近隣市に多くの認定施設があります。

【長尾委員】認定できない施設というものも出てくるわけですよね。申請はあるけれど、認定に及ばないということもある中で、例えば、遠いカリフォルニアみたいなところは認定しないというような基準があるかと思うので、距離的な基準がどうなっているのかなと思い、質問させていただきました。

【市長】現状としては、ほとんど認定されています。
　少し議論になっているのは、全てオンラインで行うということについて、当初の予定ではその場所に行くということを想定して、制度を作ったため、今の段階ではフルオンラインというのは、まだ入れないという判断をしています。そこは今後の議論のポイントになってくると思います。

【長尾委員】例えばですが、今、島留学みたいなものがあって、学校をお休みしながら島に御家族で移住されたときに、学校には行けないので、そこの地元のフリースクールみたいなところに通うという事例を少し聞いたことがあります。
　そういったときに、鎌倉市の場合はそこまで反映されるのか。距離的に難しいものなのかと思いまして、どれぐらい融通が利くのか気になったので質問させていただきました。

【教育長】そうですね。島留学もいろいろなところの取組がスタートして、島根が結構先行して取り組んでいると思うのですが、基本的には小学校、中学校、高校を地元の学校へ転籍させる、あるいは籍は鎌倉に置きながら一定期間だけ入ってもらうという仕組みです。その間は当然、義務教育や高校であればその授業料は公的なサポートが得られるか、無料ということになります。
　しかし、今のお話は島に留学し、更にその現地でフリースクールに通うという結構レアなケースだと思います。今の仕組みからすれば、フリースクールは 21 施設のみの支援ということになっており、基本的には近隣の通えるところしか認めていないので、その島の中にあるフリースクールのサポートは現段階ではないというところです。

【長尾委員】わかりました。ありがとうございます。

【事務局（教育文化財部次長）】先ほど朝比奈委員から御質問がありましたネットワークトラブルに関する件について、先ほど教育指導課の指導主事に問合せがあるというお話をさせていただきましたが、一応、問合せが集中しないように、ICT に関する問合せにつきましては、GIGA スクールサポーターでも対応できるように相談窓口を設けているという状況です。

【教育長】その GIGA スクールサポーター業者に対応してもらっているところですが、実際問題はそういったネットワークトラブルが少ない状況ということで、非常に好ましい状況だと思います。他の自治体で起こっているのは、どこかが根詰まりをしてしまって、子どもたちが一斉にデジタル教科書を開くときとか、動画のコンテンツをいろんなクラスでやっているとき、または街場でネットワークが集中している時間帯に使うときに動かないというトラブルが非常に多いのですが、鎌倉ではこういった状況はあまりないです。逆に言うと、すごく使っていないということかもしれませんが、中学校ではかなりいろいろな使い方をしている中で、根詰まりを起こしていないので、良い環境を築けているということでもあると思います。

【教育文化財部長】以前、Wi-Fi の末端の機械が壊れていたことがあり、そのときには指導主事が行ったことを知っていたので、答弁させていただきました。Wi-Fi 機器の不良の場合はそういったこともあります。

【朝比奈委員】ありがとうございます。

【市長】様々な御意見ありがとうございました。
　次に、「 (2)　教育大綱の見直しについて」、事務局から説明させます。

【事務局（企画課長）】それでは、「教育大綱の見直しについて」です。
　改めて、本市の教育大綱について、振り返りをさせていただきます。お手元の教育大綱を御覧ください。
　本市の教育大綱は、平成 28 年1月策定の第1期目の大綱において、「未来を拓け！共に育つ鎌倉」を基本理念とし、基本目標として、「子どもの健やかな成長への支援」「学校教育における豊かな学びの推進」「安心して生活できる安全な教育環境の整備」「青少年の健全な育成と支援」「豊かな資源を生かした生涯学習の推進」を掲げ、「放課後児童対策の充実」を始めとした5つの重点的に取り組む施策を位置付けました。
　そして、令和2年4月策定の第2期目の大綱において、第1期目と同じ基本理念及び基本目標を掲げ、「子ども達が夢を持って学べる教育の推進」を始めとした4つの重点的に取り組む施策を位置付けています。
　そして、この第2期の大綱が、令和6年度末を以て計画期間が満了するため、令和7年度を初年度とする教育大綱の見直しに向け、御協議をお願いできればと存じます。
　まずは高橋教育長からお話をいただけるということですので、よろしくお願いいたします。

【教育長】資料はこちらに投影します。
　これまで教育委員会の委員の先生方とは議論してきたことですが、市長とは初めて議論をスタートさせていただくことになります。
　まず、「As-Is」と「To-Be」ということで、目指すべき姿と現状を分析してその差の部分が「Action」になり、この「Action」を計画という形で落とし込んでいくということになります.

「To-Be」について、まず語り合おうということで、これまであらゆるメンバーで議論を進めてきました。教育委員の先生方とも予算などの一切の制約を排除して、これからの鎌倉のあるべき姿、教育文化をどうしたいかを話してみようということで議論させていただいて、このような形でグラフィックレコーディングを使いながら、議論させていただきました。この中で生き抜く力や、行きたいと思える学校、そういったアイデアもいただいたところでございます。

あと、教育委員会の職員ともいろいろディスカッションしてきました。その結果、例えば「子どもたちに思い切って委ねていく」とか、「みんな、私学も国立も高校生も大学生も鎌倉の子だよね」ということ、「子どもたちが思ったことを何でも言える」とか、「制限がない学びの場を」というような意見がありました。

そして、若手職員とも議論したり、あとは校長先生方とも校長会で議論させていただいたりしました。校長先生方との議論では「子どもの思いを実現できる組織作り」と、「子どもも大人もウィンウィンに」とか、「子どもの声を聞ける時間が欲しい」など、こういったキーワードが出てきました。このキーワードを使ってミッション、ビジョン、バリューということで少し整理しています。

本日は、こういったところを使いながら、後ほど議論をしつつ、自由に御意見をいただければと思っています。

後ほど御説明しますが、鎌倉全体としてのビジョンとしては「世界に誇れる持続可能なまち」、そして「共生社会を共創する」というビジョン、ミッションを掲げている中で、鎌倉市が目指す社会を我々が教育文化によって、どう実現したいのかのあるべき姿をビジョン、それから我々の使命、やるべきことをミッションとして、それを受けて、行動規範ということで、ビジョン、ミッション、バリューということで整理していければと思います。

さらに、それを踏まえた大きい方向性としてどういう施策を「Action」ととっていくのかを、5つぐらいのエリアに少しまとめてみましたので、これも後ほど議論いただければと思っています。まず、そういった議論をする前提となる情報などを少しお話できればと思います。

子どもたちの今とこれからについて、本日も午前中の教育委員会や、これからのディスカッションに通ずる部分がたくさんあると思いますが、御容赦ください。

まず、今、我々が育てている子どもたちは 2100 年という時代を生きる子どもたちであるということ。人生 100 年時代ですが、そういった時代を前提とするのはマルチステージ型というライフシフトで言われているような、学んで働いて退職という時代から、子どもたちが社会に出たときには、学んで働いてまた学び直して、違うスキルを身に付けて働いたり、またポートフォリオワーカーとして異なる仕事を並行してやりながらということがあり得る。そして、エクスプローラとして時には旅に出てみたりとか、探索する期間を経てるような時代になってくる。

まさに、教育委員の先生方はすでにそういった方々だとは思いますが、よりそういった時代を子どもたちは生きていくことになる。そして、Society 5. 0 と言われますけれども、どんどんその変化のスピードが速くなる。

ここ最近ではコロナもあり、年明け地震もありましたが、子どもたちがこれから生きていく時代は非常に不透明な時代になっていく。そして、いろんなテクノロジーが進んでいく時代でもあります。

こちらは Copilot（コパイロット）という、既に Microsoft でリリースされている AI です。

（動画を再生）

メールの返信であったり、会議の概要をその場で作ってくれたり、今日のスライド資料も作ってもらったのですが、こういったツールが我々の普段使っている Microsoft のツールに入ってきている。いわゆるまとめ発表というような情報を集めて、整理して発表するだけの学びはもうほぼこのツールに置き換わってしまうと思います。

また、こちらは 12 月に出た Gemini（ジェミニ）という Google の AI ですが、画像から言語化するというものです。

これは今年になってからですが、GPT-4を使って無料で自由にアプリを作れるものがリリースされています。簡単に対話型の、例えば分数を教えるポットなんかはかなり自己学習させて、上手に分数を教えられるアプリを誰で

もつくれるようになったり、そういった教材がどんどん生まれています。これも驚きだったのですが、今年になってから発表されたスタンフォード大学の Mobile ALOHA（モバイルアロハ）というロボットです。自己学習していくものになっていて、例えば「この料理を作って」という指示だけでどんどん料理の仕方を改善していく AI です。画像を認識して、力加減を調整し、卵を割ってかき混ぜ、焼いて、調理をして、お出しするというものです。この後ろに人がいるわけでもないですし、人がプログラミングしているわけでもない。ディープラーニングで学んでいくというものです。

こういう時代を子どもたちが生きていくことになります。Society5.0 と言われるとよくわかりませんが、とにかく生成 AI とロボティクスを見ると、これから子どもたちが生きる時代がすごくよくわかるなと思っています。

この前、国際機関である OECD（経済協力開発機構）の PISA（Programme for International Student Assessment の略称）という学力調査がリリースされました。そこからわかったことを少しお話しますと、よく順位が注目されますが、日本はすごく高いです。日本の子どもたちが頑張っていることは以前からわかっていて、それは変わらないのですが、今回特徴的だったのはコロナ禍の調査だったので、コロナの影響というのがヨーロッパの各国は特に如実に出て、点数が下がっています。

日本の子どもたちは下がらなかったということで、日本の学校及び先生方の力を見せた調査になった一方で、体力はガクッと落ちています。やはり、コロナ禍で運動習慣が失われたということなのかなと思っています。これは私が福島県にいたときの原発事故の後も全く同じ状況でした。原発事故後も学力は下がらなかったのですが、体力はガクッと下がりました。あとは、閉校した期間と学力に如実な相関がありました。コロナ禍でも日本はあまり学校を閉めなかったんですね。ヨーロッパの国はかなりの期間で閉めていたので、それでかなり学力が下がってしまったと思われます。これは、能登の地震などにも通ずる部分で、いかに早く学校を開けるかというのが、子どもたちの学力を維持するミソだと思います。

そして、総じて言えるのは、日本の教育のレジリエンスが証明されたということ。レジリエンスというのは柔軟性である力強さ、ぶれないというようなところが証明されたというところです。数学の成績も下がらなかったし、公平性も下がらなかったし、子どもたちが学校に比較的満足しているというのを満たしている国は4か国しかなかった。こういった世の中で生きていく子どもたちが、どういう状況なのかというのは、今、教育委員会の中でもデータ分析をしています。

子どもたちへのアンケートの状況について、鎌倉の子どもたちの自己有用感が非常に高いですし、本をよく読んでいますし、家庭での学習時間が長くて、その結果、学力の高いという状況が見えると思っています。そして、部活動にも非常に熱心に参加していますし、中学校で言うと ICT の活用頻度が非常に高いですし、SDGs や海外グローバルなんていうことにも関心がある子が特に中学校は多いです。

こういったところを踏まえて、SWOT分析してみると、もちろん強みがいろいろ出てくるので、それに沿った方向性というのを考えていかなければいけないということで、教育委員の先生方とも少し議論してきたところです。

それでは、具体的にどういった学び舎を目指していくのかについて、少し抽象的にお話させていただきます。本日は、社会教育や文化まで話が至らないと思いますけれど、学校教育を中心にお話します。

これからの教育大綱で定める教室のイメージというのは、基本的には大きい方向性はこういうことかなと思っています。以前も少しお示した通りで 40 人のクラスに、いろいろな子どもたちがいる中で、先生方も非常に大変な状況という世界観から、デジタルも活用しながら個別最適で協働的な学びを行っていく。それを教師による一斉授業から子ども主体の学び、同一学年から学年に関係なく、同じ教室か教室以外かの選択肢があり、またティーチングからコーチングに変わっていくなど、一足飛びに行くわけではないと思いますが、大きい方向性としてはこうな

っていくと考えています。

こちらは岩岡教育長から引き継いだ資料で、いろんなデジタル教科書だったり、AI ドリルができたと引き継いだのですが、さらに今も進んでいると私は思っています。

こちらは、先生方に御覧になっていただいた御成中学校の研究授業の次の日だったかと思います。教室の中で先生から教えてもらう子もいるけれども、自分自身で学び取っていく子もいて、わかりかけている子には教えてあげるというような個別、共同というのが一つのクラスルームにあるクラス。先生が話す内容だけを聞くというような授業制度はもうなくなってきている。

それを絵にするならば、教わる授業から学び取る授業へということだと思います。教え込む瞬間ももちろん大事ではあるのですが、先生が教えるというようなことだけではなく、そこは最小にして行くことも必要です。テストすれば身に付くものもあるけれど、すぐ忘れてしまう。タブレットは別にこういった授業だったらいらないよねと言う話になるかもしれませんが、子どもたち自身に学びのハンドルを握ってもらい、自ら学び取っていくということを考えたときにタブレットはやはり必須なんです。その中で、対話があって振り返りがあって、目当ての確認があってということで、知識、技能、思考力、判断力を良く使われている。

これは 1990 年にブランソンという人が出したモデルで、だいぶ昔の世界ですが、ようやくこの世界観ができるようになってきたと思っていて、先生が一方通行で教えるというパラダイムから子どもたち同士が対話する、先生と対話するというような学びが生まれてきている。一方で、全て、先生を介してでないと進まないというシステムから、この中央に知識データベースエキスパートシステムとこの当時は言っていましたが、いわば生成 AI であったり、1人1台のタブレットというものが、もはや現実のものになったので、子どもたち自身がいかようにでも学べるツールはもう揃っている。その中で、子どもたち同士が先生たちと生徒が学び合っていくというようなパラダイムに必ずや変わっていくと思います。教師がいなくなるとか、必要なくなるということでは全くなくて役割が変わってくるということです。それは授業の改善というのと、業務の改善というのを一体的に進めることが可能になると思っています。子どもが自立した学び手になっていけば、先生方が手取り足取りで全てを指示するというような形にならなくても良い。そうなると業務改善にも繋がっていくように目指すべきではないかと思います。

これまでは例えば、丸つけやドリル学習のチェックなど、先生たちがやってきた様々な仕事は、ほとんどの部分を子どもたちに委ねていくことになり、先生たちは問いを出したり、価値づけ承認をしてフィードバックをしたり、対話をしたり、安全な場を作ることをしっかり確保していくことで、子どもたち自身が掴み取っていくと、そういったことを行うことによって、働き方改革や授業の向上というところを実現していくということだと思っています。

それは、最初からできるわけではなくて、だんだん子どもたちが自分で自己決定して、自立した学びになっていくことだと思っています。これを鎌倉でぜひ目指していきたいと思っています。

これは先週、岩瀬中学校に行ったときに、非常に素晴らしい授業を行っていたものです。20 代の先生の授業だったのですが、もう 12 月までに2年生の単元を全部終えてしまったので、あとは単元ごとの自由進度学習ということにしていました。子どもたちに学び方を選ばせて、子どもたちに評価をし、自分たちで進めて学習したのでスピードが2倍ぐらいだったのと、しっかり身についているので、1月、2月は何をやるかは班ごとに自由な単元、自由な実験を選んで、それぞれでどうぞというやり方をしています。こちら映像になっているので御覧ください。

（動画を再生）

これは計算問題を解いている班、こちらは火を使った実験、こちらは植物の実験、こちらは雲を作る実験、こっちは電気を繋げて温度を上げています。先生はこのテーブルを回って、指導するのですが、「こうしなさい」ということは一言も言わず、7割は問いでした。「どうしたらいいと思うか」、「何を考えていますか」など、2～3割が提案、

深まっていないグループには教科書を開いて示して、そこをやってみたらどうかという提案をしています。

子どもたちは、もう誰1人取り残されずに全員の頭をフル回転する1時間を過ごしていました。本当にすごい授業だなと思いました。こういったところを作っていきたいなと思っています。これぞ個別最適で協働的な学びの一つの姿かなと私は思っています。もちろん、これが正解とか、みんなこうすれば良いというわけではなく、一つのフェーズとして、これが出現したということです。

質の高い学びと持続可能な学校を同時に実現していくということで、質の高い教育を実現して子どもたちの成長と笑顔が生まれる。その上で教職員もやりがいを実感して、そして保護者や地域からも信頼される。そして、これから教育界、鎌倉の先生になりたいという若者を増やしていくような良い循環を起こしていきたいという学校教育で目指したい姿です。

さて、教育大綱の方向性の話ですけれども、今の大綱は教育プランと生涯学習プラン、そして市全体の総合計画がございます。ここをある程度まとめて令和7年度から一体で推進していくということを考えています。これが現行の持っているものです。

繰り返しになりますが、あるべき姿と現状、その差があるのでその差分を「Action」として打っていくという考え方で、この中の「To-Be」が教育大綱の改定、そしてこの「Action」で何をやるかは、教育プランと生涯学習プランの改定、そしてこの「As-Is」というのが、今やっているデータ分析です。

そして、ポリシーピラミッドということで、こういった体系かなと思っていて、これもあくまで一案なのですが、まず土台にあるのはソーシャル、カルチャー、キャピタルといっていますけど文化、そして生涯学習、そういったところを基盤としながら、学校を基盤としてコミュニティスクールや働き方改革というのがあり、学校の運営を盤石にしていく。そして、学習者中心の学びアクティブラーニングという言い方が良いかどうかは、一旦置いておいて、GIGAスクールを活用した教育 DX というのを行っていく。このオルタナティブは、ULTLA プログラムや多様化学校、フリースペース、これは不登校対策という視点だけではなくて、ここで培ったノウハウであったり、センスを学校全体、鎌倉全体に伝えていきたいというような趣旨になります。

そして、society5.0 を見越した企業や大学などとコラボしたような学びで生まれてきたものも、また要石の施策として、鎌倉全体に波及させていきたいというような、このレイヤーを考えています。

鎌倉ならではの教育というところでいくと、鎌倉市が目指すビジョンと指導要領の前文というのは親和性があると思い、この辺も繰り返しなのであまり説明しませんが、「如意」を英語で言えばウェルビーイングなのかなと思います。または七色畑という鎌倉野菜のような多様性、共生社会というところを教育でも目指していきたい。そして、「炭火」というキーワードが、教育委員会の中でも出てきたものですけど、炭火のように子どもたちが学校を卒業しても学び続けるような、ワクワクしながら学び続けられる子どもを育てたいというのが、鎌倉の願いかなと思います。

そして、教育委員会の仕事の仕方も管理型のリーダーシップではなく、伴走型のリーダーシップ、サーバントリーダーシップを発揮していく。教育長である私自身もそうありたいなと思っています。

そういった子どもたちの探究的な学びというのを、先生方の学びや教育委員会職員の学びも相似形にしていきたいという教職員支援機構の資料になります。

これは同じ形でないといけないと考えると、本当に子どもたちにアクティブラーニングをしてほしいと思うならば、先生たち自身、そして教育委員会自身も探究的な仕事の仕方、学び方をしていかなければいけないということで、先生と教育委員会の橋渡しなども教育長サロンと言っていますけど、オンラインで教育長と先生方や教育委員会事務局職員が、月1回の待ち合わせ場所ということで勉強会をしています。今度 18 日も行いますが、こういった場で私自身も学びながら、先生方と一緒に進めていきたいと思っています。

本日はフリーで御議論いただければと思いますが、論点としては、特にこの「To-Be」の部分だと思います。鎌倉の教育文化はどういったところを目指せば良いのかというところで、また前回教育委員会でも議論しましたが、また御意見をいただければと思っているのと、そしてビジョン、ミッション、バリューというところで、今までの議論をまとめてみました。

鎌倉市全体のビジョン、ミッション、バリューが前提になっていますが、ビジョンがあるべき姿、教育文化を通じて作りたい鎌倉の未来というのは「如意」、これは如意棒の「如意」なので、自分も他者も自由自在であるという禅の言葉と伺っていますが、ウェルビーイング&サステナビリティというならば自他ともに自由で自分らしく生きられるように教育を通じて目指したい。そして、鎌倉野菜から七色畑、誰1人取り残されない、先ほどの授業のような形で多様な個性が発揮されて、豊かに暮らせる社会となるように。そして、「炭火」は探究ということで、炭火のようにワクワクしながら生涯に渡って、学び続ける豊かなコミュニティを築きたい。英語では何と言うか迷いましたけれどコミュニティオブエクスプローラというふうに作りました。

ミッション・やるべきことを、このビジョンを踏まえて、どういったことをやるべきか、我々教育委員会・学校が何のために仕事をするのか、その存在意義、果たすべき使命みたいなところは学習者中心のワクワクする学びの転換、それから鎌倉の宝をコラボしたような学びプロジェクトの推進を図りたいと思います。確かに、多様な学び方で個別最適で協働的な学びを創造、そして伴走型の教育委員会の学びの相似形ということをやるべきことと思っています。

そして価値観・バリューが、鎌倉が守るべき教育の価値や行動指針のものですけれども、こういったことかなと、ここら辺はまだもめていませんが、キーワードを拾って、少しまとめてみました。大人も子どももワクワクする。それから、月曜日に行きたくなるような学校、そして学びのハンドルを自分で握る、宝物を皆でといったところでまとめました。これはロジックモデルということで、教育委員会の姿が学校に伝播して、学校の中で子どもたちと先生方が伝播し合いながら、教育を通じて市民の姿、あるいは地域文化というのは形づけられて、そして教育を通じて実現したい鎌倉や日本というのが、生まれていくというロジックになっています。

そして、いくつか論点として、紙ではお配りしていますが、この議論限りでないので、自由に御意見、御質問などいただければと思っています。

長くなりましたが、以上です。

【市長】それでは、今の教育長のお話を受けまして、それぞれ御意見、御質問等あればお願いしたいと思います。

私から一つ、先ほどの PISA 調査の比較というところで、点数が高いことが本質ではないというところがあったかと思うのですけれども、何を指標にしていくか、何が指標になるのかという具体的なものがあったりするのでしょうか。

【教育長】ありがとうございます。順位が本質ではないというところは、例えば教育におけるウェルビーイングに関するレジリエンスというところがあります。これは、私は極めて重要なものかなと思っています。

ここの指標になっているのはどういうことかというと、「子どもたちが学校が楽しい」、「人と人の繋がりが温かい」、「自分が価値のある存在だと思えている」とか、逆にあとは「他者を価値のある存在だと思えている」とか、あとは「自分の課題と世界の課題、SDGs 環境問題が繋がっていると思える」とか、こういったものを点数化しています。

比較的に日本の子どもたちはそういった、いわゆる非認知能力であったり、社会情動的スキルと言われたりしますが、そういったところが弱い項目もあります。例えば、日本の子どもたちは遠慮がちなので、自己効力感が低かったりします。

自分で鎌倉や社会を変えられると思えるかと聞いたりすると、意外と高くは答えてくれなかったりしますが、こういったところはすごく重要な指標なのかなと思います。

実はスクールコラボファンドの実践でも、あとは先ほどのような個別最適な学びを実践されている先生の授業でも、急に学力が上がったというエビデンスは今ないです。それは世界中あまりないです。

ただ、子どもたちの「やらなければいけないこと」、「やってはいけないこと」ばっかりという状態ではなくて、自分自身が選んで、この学びをして、自分が成長しているという実感が得られることで、ウェルビーイングが高まるんですね。

その多様性を包摂して、自分の価値というのを築けることはすごく抽象的な言い方ですが、そういったふうに感じられる子どもたちを増やすということで、そういった指標を使っていくことが、大事かなと思います。

【林委員】私、鎌倉の教育にずっと携わっていて、昔話をすると教育長が「やっと時代が追いついてきましたね」って言ってくださるんですけれども、今のお話はカタカナが多いけれど、昔やっていたこととあまり変わらない気がしています。昔は何がなかったかというと AI、ICT、GIGA がなかった。そういうシステム的なものはありませんでしたが、それをコミュニケーションと人脈を伝手にしてどうにかして、こういうことやっていたなと思います。

全く新しいものをこれからやるわけではないというのを、今の現場の先生方にも伝えていきたいなと思っています。「こういうのがあるから昔より楽になったよ」とか、「そういうのを使えばもっとできるじゃない」ということを伝えたいです。

昔は勉強が出来ない子が通知表に、「僕〇がついてないけど」と言ったときに、私がフォローしようと思うと、クラスの子が「お前はいいんだよ。お前は他にこれができるじゃないか」というような声掛けをしてくれて、よかったと思うことがありました。そういういわゆる人としての学校を作っていくというのは、これからも必要なことだと思います。

先生方の研修の際に、私は釣りに例えて、色々な「～したい（鯛）」、「～やってみたい（鯛）」とお魚の鯛にかけて、魚を釣るときに、釣れる場所やタイミングを魚釣りの人が地合いという言葉を使うことを知って、教師はその地合いを見極めて、子どもがやりたいときにやりたいものをポンと投げて込んであげるというのが教師の仕事ですよという話をしたことがあります。

まさしく、さっきの岩瀬中学校の話も、やりたいものがある子たちに、先生がポンポンと投げて込んであげるという、それがフォローになって自分たちでまた前に進むということは昔からもあったし、ただそれを昔の話ではなく、これからは色々なものを活用してできるんだということを、私は今お話聞いて思いました。やはり鎌倉の教育感覚は全く変わっていないし、きっとこれからも変わらないだろうと思います。

ただ手段が変わってくるのだろうから、その手段を子どもも教師も拘らずに使っていこうという後押しのできるような大綱になったらいいなと思いますし、学校だけでなく、それこそ子育て、赤ちゃんの部分もやっていることは昔と変わらない。でも昔はこうだったけど、今はこうなんだよ、いろんな助けがあるよということを伝えていきたいです。

【長尾委員】私は感想です。林委員のお話について私もその通りだと思いまして、自分も子どもの頃だったり、自分の子どもを見ている中で、学校って、やらなければならないことが8割方を占めていたような気がしていて、そこからできることが増えている。で、その先にようやくやりたいことってそのトライアングルのこの三つが重なる部分をどうやって広げていこうかという話ができるまで、非常に時間がかかったように思います。自分の体験も含めて、その3つが重なる部分をいかに広げるかというところを、正々堂々と言えることは寛容さを含めてすごく未来が明るいなと思いました。

なかなか教育現場では「点数を取らせないといけない」とか、「やらないといけない」とか、「この単元を終わらせないといけない」みたいなところに追われているようなところと、やりたいことがあってそれが個別最適に、それこそ先生方も含めてできるという環境をどうやって言語化することが、それが神髄まで、地の果てまで届くのかが課題かと思いますけど、私の中でも非常に何か腹落ちをしますし、そういったことがこの大綱の中で、この先の私達の活動なんかもきちんと落としていくべきだなというのを、教育長のプレゼンからも非常に感じました。

【朝比奈委員】「炭火のように」の根拠って何だったかなと考えていますが、実は最近ある方がある企画で、私のお寺に来て、自分でお持込みになった焚火の道具を使って、しかも自分で薪を持ってくるのではなく、4種類ぐらいの材料を並べて、まるでお茶の手前みたいに丁寧に火を起こして、最終的に太い薪に火をつけていました。みんなは炎がメラメラと燃え上がっているのを焚き火だと思うかもしれないけど、本当はこの炭の状態になったのが良いんだと、そこから、またじっくりと火が続くんだという話をしてくださって、なるほどなと思いました。

炭火って、この表現なのかなと思ったりもしたんですが、どういうイメージですか。

【教育長】私以上に御説明いただいて、ありがとうございます。本当にそういう思いです。

学校を出たら、学ばなくなってしまうというのだと、これから子どもたちが生きていく時代だと耐えられないと思います。常に学び直しながら、アップデートしながら、いろいろな課題や仕事に楽しみながら取り組んでいくということが大事だと考えたときに、教育委員会のある指導主事から、「かつて炭火総合という総合的な学習の時間を作っていた」という話を聞いて、いいなと思いました。

炭火のようにじんわりとずっと燃え続けるというのは消えないんですよ。花火のような学びではなくて、一発限りの打ち上げも大事かもしれないけれども、誰かに焚きつけられるのではなくて、自分自身をずっと燃やし続けるということが大事だと思います。

リチャードライアンという研究者がいますが、外発的動機付けと内発的動機付けというものがあって、外発的動機付けはどちらかというと花火っぽいイメージで、テストがある、入試がある、お母さんや先生に怒られるかもしれないから取り組むというのは外発的動機付けで短期しか持たない。

一方で、炭火のようなずっと燃え続けるのは自分の中にある動機、自分がワクワクする、何々したいと思えるwillだと思います。そのwillを大事にすることを形にしないと、学校を卒業したらもう学ばなくなる、テストが終わったら学ばなくなる子どもを育てたいわけではない。本質にタックルしたいという思いで「炭火」としました。鎌倉らしいなと思っています。

【下平委員】教育長の熱い思いも伺い、素晴らしい資料でご説明いただいたので、申し上げること何もないです。そもそも鎌倉市がつくる教育大綱はどこに視点を置かなければいけないのでしょうか。今日も具体的に事務局から施策の経過を御報告いただいたように、教育大綱を基に基本目標ができ、実際の施策が決まっていくわけで、行動に繋げるために、どこに教育大綱を位置付けるのかということが、自分の中で曖昧になってきています。

例えば、いただいた資料2の2ページ目のロジックモデルにありますが、「教育を通して実現したい社会像」というのはどちらかというと文科省がやるべきことではないかと思います。また、「如意」とか「七色畑」とかというのも、素晴らしい言葉であり、当てはめだは思いますが。

こちらについて教育長は、例えば「如意」や「七色畑」など、イメージが浮かぶものを教育大綱として考えていらっしゃるのでしょうか。先ほど、「To-Be」を目指した「Action」は具体的な事項であって、教育大綱ではないと位置

づけてらしたと思いますが、私達は「如意」とか「七色畑」という大綱を作れば、教育大綱策定完了なのですか。

初回の大綱作成で、話し合ったときにも、このような論議もあった上で、結局かなり具体的な基本目標と施策にまとまったという経緯もあるので、今回も最終的にどうするのかを考えておきたいです。私達が考えるのは、大きなお題目として「如意」などを掲げれば良いのか、そうではないとすると結果的には同じような形に最終的にまとまりそうな気がするので、教育長はどのようにイメージをしてらっしゃるのかを伺えたらと思います。

【教育長】確かに下平先生のおっしゃる通りで、我々も実際に悩んでいるところもあります。

校長会や教育委員会の管理職で議論してきた中では、いわゆる行政文書的なものにはあまりしたくないと思っています。みんながこれに向かって頑張ろうと思える、教育関係者文化関係者が口ずさみながらやっていけるような「To-Be」だといいなということは議論してきました。

イメージとしてはこの3つのプレイヤーがありまして、「To-Be」のところに一つ根幹としてあるのはまた英語になってしまって申し訳ないですけれど、MVV という、さきほどのミッション、ビジョン、バリューという大きいあるべき姿、使命、そういったところがわかりやすいフレーズも含みながら示す。これからでも如意とかを使う必要はないと思っています。それをこれから磨いていくというようなことだと思います。

その中で、やはり4つぐらいの基本的な目標であったり、基本的な方向性というのは、そのミッション、ビジョン、バリューに基づいて導き出すと、仮に4つだとして、大綱に入っているものが、この4つの目標などに整理されていくというのは必ず必要だと思います。ここはどちらかというと、文章的なワードに変えことになってきますし、3番はこれはいろいろなデータを合わせて可視化していくというような構造かなと思っているので、それでこの全一体でこう考えていくということにすると。これを見れば、目指すべき姿とやるべきことがわかるような、まとまりの文章にしたいというのが今の思いです。

さらに言うと、確かに教育を通じて実現した社会像までいくと、かなり大きい話になってしまうので、これはまさに世界に誇る持続可能なまち鎌倉になると思います。これそのものは、教育だけで実現するものではなくて、教育を通じて実現するし、福祉も様々な施策を通じて目指すべき姿ということで、それがまさに総合計画と接続していくことになると思います。

例えば、4つの柱と申しましたが、4つの柱に近いものがあるとすれば、5本の柱というピラミッドの基本的方向性、基本目標に近いものだなと思います。これはこれで磨かないといけないと思っています。

【下平委員】さっき教育長からもあえて今、小中学校に焦点を合わせてという説明ありましたけど、やはり鎌倉市の教育大綱となると、これは小中学校だけの問題ではない。

生涯学習なども、ここにも入りますよね。大人たちがワクワク生き生きしていれば、子どもたちも未来に夢をいだけるでしょうし、そういう視点も絶対失ってはいけないと思います。

そうすると、ロジックモデルの「教育を通じてなりたい市民の姿」生涯にわたってワクワク自由で、様々で多様で、お互いが協力し合い、というところは大事だと思います。

【長尾委員】教育長のプレゼンのプロセスの中で様々なレイヤーの方とディスカッションしていただいて、キーワード出しをしていただいて、そこが教育委員会の先生と校長先生で、今のキーワードが出てきたというふうにプロセスを理解しております。ここまでのプロセスで、皆さん非常に腹落ちをされていると思いますし、領域的にも認識も含めて、目線が合ってきている気がします。

この先のどうアウトプットするかというところは、おそらく物が出てこないことには、それが良いのか、悪いのかという方向性が見えないと思います。

そのため、この先のプロセスは、どのタイミングで、どういう議論がなされる場があるのを少しお聞かせいただければなと思います。

【教育長】ありがとうございます。

今後のプロセスとしては、今日の議論を踏まえたような形で少し素案のような形を作成してみたいと思います。その過程では、総合教育会議は何度も開くわけにいかないと思いますが、教育委員会などで少しまた議論させていただく可能性があります。その素案を基に例えば子どもたちであったり、他のプレイヤーにも、考えを聞いていきたいと思います

あまり柱立てがあるような文章に対して、意見を求めても、「もう少しこの言葉遣いの方がいいのではないか」という意見が出しにくくなると思う。少し柔らかい段階で、子どもたちの色々な思いも引き出せるぐらいの粗さの素案で、意見をもらうようなことを考えています。

その際に、企画課で策定作業をしている上位計画の総合計画があるので、大綱よりも1年後の令和8年4月を初年度としているものですが、そこともどう噛み合わせられるか。子どもたちにしてみれば、教育の大きい姿も、社会の大きい姿もかなり親和性がある部分なので、一緒にワークショップを行うのもいいでしょうし、Google フォームのようなもので、いろんな子どもたちから意見を聞くのも良いと思います。本当にいろいろなやり方があると思っていて、子どもたちだけではなく、教育委員会職員や先生方であったり、文化関係者であったり、そういったところの意見を聞くケースもあると思います。更に言えば、その先にはパブリックコメントをやったり、実際に文章を見てもらうフェーズも必ずきますので、文章になってから意見が欲しいと言われるよりは、少し柔らかめの素案でいろいろな方との議論、御意見をいただくような形にしたいなと思います。

【長尾委員】おそらくアウトプットがないと、そこはどういうアプローチになるのかは難しいですね。

【下平委員】繰り返しになってしまうのですが、やはり根本は生きる力だと思っています。大きな災害に遭ったときも、どんな時もくじけずに、折れない心が大事だと思います。レジリエンスという言葉も出ましたけど、そんな中でも生き抜いていく力が子どもであろうと、大人であろうと必要だと思います。ウェルビーイングはそれを言うのかもしれませんけれども、自己効力感と自己肯定感がしっかり備わっていれば、他者を肯定すること、他者を大事にすることも当然できます。そういうことを知る社会とか教育とかがとても大事だなと改めて、話も聞きながら再確認をしておりました。

【長尾委員】私達は、教育長のプレゼンテーションの最初から最後までのところで異論はないような気がしていて、プロセスの前で語っていただいている範疇を含めてなので、これをどうまとめるかが大変だと思われますけれども、そのときに過不足だったり、書き方だったり、訴求の仕方みたいなところのアウトプットは、先ほどお話しいただきましたので、そこでもう1回議論ができる。

今回、皆さんの認識合わせができたと思います。自信を持って、この話を自分たちの言葉として語れる状態だと思います。ありがとうございます。

【林委員】策定にあたって、これから他部署からの意見もいただいていくのですよね。

【市長】そうですね。

【長尾委員】今後は、次のステップに進めれば良いかなと思いました。

【市長】課題としてはおっしゃっていただいた総合計画との接続の部分と、市の他の政策との連携というところを、どう見えるようにするかですかね。

【長尾委員】ただ、これに対する議論はもうある程度出尽くしたと思うので、ぜひ、次のステップで検討していければいいのかなと思います。

【市長】そこは課題としていただきながら、次に向けて進めて行ければと思います。ありがとうございました。
　次に、「3　その他」について、事務局からお願いします。

【事務局（企画課長）】これまで、この総合教育会議でも3回ほど御議論いただきました鎌倉市ケアラー支援条例の制定に向けた取組についてですが、鎌倉市議会2月定例会において議案を提案いたします。
　現在、条例案の最終調整を行っているところですが、条例では、全てのケアラーを包括的に支援することで、ケアラーが孤立することなく、自分らしく暮らすことのできる社会の実現を目指すため、基本理念等必要な事項を定める予定です。
　本条例の特徴的な理念として、ケアラー支援にあたっては、ケアラー本人への支援のみならず、ケア対象者も含めた包括的な取り組みを行っていくこと、年齢を問わず切れ目のない支援を行うこと、ヤングケアラー及び若者ケアラーには特に配慮をして支援を行うことを規定する予定です。
　引き続き、支援を行ってまいりますので、御協力をお願いいたします。
　以上で説明を終わります。

【市長】議会前ですので、より詳細なところは議会で審議いただいてから詰めさせていただければと思っております。
　では、他によろしいでしょうか。
　（意見等なし）
　活発な御議論ありがとうございました。
　以上で令和5年度第3回鎌倉市総合教育会議を終了します。
　ありがとうございました。